

かかわりを生きる

自然・からだ・ことば



武蔵野大学教育学部幼児教育学科リカレント
企画シンポジウム

2020.12.19 土 13:00-15:00 オンライン開催 (参加無料)

今回で3回目となるシンポジウム。これまで「生きる」ということをテーマに様々な語り合ってきました。そして2020年の今回は covid-19 が私たちに発している問いは何であるのか。私たちが世界とは本来どう関わるべきなのか。人と人が関わりとはいったいどんな意味があるのか。本当に豊に生きるとはどのようなことか。そうした根源的な問いをできるだけ遠くから照らし出してみたいと思います。

参加ご希望の方は、【2020年12月12日】までに以下からお申し込みをお願いいたします。
事前登録のメールアドレスに当日の開催案内詳細 (Zoom 情報) をお送りします。

https://docs.google.com/forms/d/11e86a7gPAOSrNhl170JPtIPNQb3leurKGlcqbh4U0/viewform?edit_requested=true



世界の幸せをカタチにする。
Creating Places & Happiness for the World



主催：主催：武蔵野大学同窓会むらさき会支部会 保育・幼児教育同窓会
問い合わせ：武蔵野大学幼児教育学科 義永睦子 (mutsu-y@musashino-u.ac.jp)

2020.12.19 土 13:00-15:00 オンライン開催 (参加無料)

武蔵野大学教育学部幼児教育学科リカレント
企画シンポジウム

講演・シンポジスト



川口 陽徳 千葉経済大学短期大学部・専任講師

専門は、教育人間学、「わざ」の伝承。言葉にできない知をどう伝えるか、大人（一人前）になること、先人から学ぶこと、人間の心身の可能性などについて考えています。慶應義塾大学文学部国文学科卒業。東京大学大学院教育学研究科修士課程修了（教育学）。同研究科博士課程単位取得後退学。2020年4月より現職。2004年から合気道の道場に入門し、「わざ」の世界の内側に身を置いています。著書に、『日本の「わざ」をデジタルで伝える』[共著]（大修館書店、2007）、『わざ言語—感覚の共有を通しての学びへ』[共著]（慶應義塾大学出版会、2011）。



明石 修 武蔵野大学工学部環境システム学科准教授 博士（地球環境学）

国立環境研究所 社会環境システム研究センター特別研究員等を経て現職。専門は環境システム学。気候変動をはじめとする地球環境問題についてシステム論的視点から研究、教育活動を行っている。物質やエネルギーが循環し動的平衡を保つ地球上において、どのようにエコロジー（生態系）とエコノミー（経済）を調和することができるか、ひとと自然の関係性をつなぎなおすことができるか、について考えている。その実践として、パーマカルチャーという手法を使った暮らしやコミュニティづくりも行っている。



箕輪 潤子 武蔵野大学教育学部准教授

専門は幼児教育学・保育学。
砂場での子どもの砂や仲間とのかかわりを研究する一方で、保育者の専門性についての共同研究を行っている。著書に『遊びがもっと魅力的になる -3・4・5歳児の言葉かけ- 砂場編 -若手保育者の指導力アップ』（明治図書）、2009論文に『砂場における山作り遊びの発達の検討』保育学研究 45(1),42-53,2007（単著）『時間に制約のある片付け場面における保育者の援助と意図』保育学研究 55(1), 6-18, 2017（共著）



熊岡 未来 武蔵野大学教育学部児童教育学科保育・幼児教育専修 2016年卒業

卒業後はNPO法人横浜にプレイパークを創ろうネットワークでプレイリーダーとして3年間勤務。その後もあなキッズ自然学校のちがさき・あな保育園の立ち上げから関わり、保育士として現在勤務している。子どもにとって遊びとは？のびのび生きるって？自然体験は必要？地域における保育園のあり方って？などをキーワードに日々子どもたちと共に過ごしている。

司会



生井亮司 武蔵野大学教育学部教授 博士（美術）

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了 博士（美術）。東京藝術大学美術教育研究室助手、鎌倉女子大学非常勤講師等を経て現職。専門は美術（造形）教育哲学、彫刻制作。近年は哲学を援用しながら美術教育の人間形成的意義についての研究を行っている。また社会実装としての哲学対話（哲学カフェ）なども開催している。主に国展、個展を中心に作品制作発表を行う。主著は『美術と教育のあいだ』（東京藝術大学出版会、2011年）。



COVID-19の感染拡大によって世界は未曾有の事態に直面し続け今なお感染拡大は終息が見えません。日本国内においてもまだまだ予断を許すような状況ではないことは確かなことでもあります。ところがこうした事態の中で人々のいち早く今までの日常や今までの経済活動を取り戻そうとする意識は根本的な問題から目を逸らし経済が生命かといったことが議論の中心になっていきます。もちろんこうした事態がこれまで「当たり前」にあった日常の生活がどれだけありがたいものであったかを示したことは異論はないし、そうした日常へといち早く戻ろうとすることは全く否定すべきことではありません。しかし、世界的な未曾有な事態が露わにしたことは一体何であるのか、その事態が私たちに問いかけていることは何かということ立ち止まって考えてみることも、日常を取り戻そうとすることと同じくらい重要なことかもしれません。むしろ今の只中でしか考えることができなくなっているかもしれない。しかしながら、私たちがそれが何であるか、と問いかけなければならない相手は311の時も同様であった様に正体がわかりません。また私たちがこれまで拠り所にしてきた生活の経験や学問的知識を持ってしても「正解」を語るなど容易にできそうもありません。人生において大切なことには「正解」などないように。しかし、このように誰にも「正解」を語るができないという事態を逆説的に捉えてみるならば、確かにあるのは「問い」ということとなります。そしてこの「問い」はあらゆるものとの関係の中に私たちを連れ出すことを可能にします。言い換えるならば「問い」を持ち「問い」に巻き込まれるということは世界との関係の中で思考することということ意味すると同時に世界という流動体の中に「住まう私」を取り戻すことを可能にするはずです。そこで本シンポジウムでは様々な視点から、人間が世界と「関わること」の意味をあらためて考えてみたいと思います。

自然・からだ・ことば
かかわりを生きている